「逃げ遅れる人々　東日本大震災と障害者」紹介記事

第3種郵便物認可　福祉新聞

あの日、障害者に何が起きたか

震災ドキュメンタリー映画 完成

東日本大震災で被災した障害者たちの現実を記録したドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々」が完成し、記念上映会が2月3日に東京都渋谷区の東京ウィメンズプラザで開かれる。東北関東大震災障害者救援本部の製作（飯田基晴監督）。

震災時に障害者は、情報が得られなかったり、「利用できない」「周囲に迷惑を掛ける」などと避難所生活を諦めたりした。原発事故が起きた福島では、避難区域に障害者が取り残されたりもした。こうした実態について、被災した障害者や関係者の証言をまとめた。

岩手県山田町で、障害者から避難時の様子を聞くボランティア（全国自立生活センター協議会提供）

上映会は午前11時からと午後2時からの2回あり、障害の有無にかかわらず1人1000円。

申し込みは、本部事務局の全国自立生活センター協議会（☎042・631・6620 FAX660・7746、genhonbu@gmail.com）へ。①氏名（ふりがな）②連絡先③希望の回④補装具⑤介助者の有無と人数⑥情報補助の希望⑦託児希望の場合は子どもの年齢・人数・障害の有無――を記載してファクスかメールで予約する。

なお、映画の上映権付きDVDも1万円で発売中。今後は、全国各地で上映会を開いてもらえるようにしたいという。

20130107 福祉新聞

震災で困難の障害者に迫る

30日、八王子で上映会

東日本大震災で障害者が直面した困難を紹介するドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々」（飯田基晴監督）の上映会が三十日午後六時半から、八王子市東町のクリエイトホールで開かれる。被災した障害者らを招き、上映後に八王子で必要な備えの提言を聞く。

映画は、障害者や施設のスタッフ十人以上のインタビューを中心に構成。「迷惑をかけるから」と避難所でのトラブルを恐れて自宅にとどまったり、避難所にベッドがないためにずっと車いすから降りられなかったりした障害者の心境にスポットを当てている。

製作した東北関東大震災障害者救援本部（八王子市明神町）などの主催。定員百七十人の予約制で、先着順。料金は一人千円。問い合わせは、救援本部＝電042（631）6620、ファクス042（660）7746＝へ。

映画「逃げ遅れる人々」で、避難所での苦労を障害者が訴えるシーン（主催者提供）

20130326 東京新聞

朝日新聞（夕刊） 2013年（平成

逃げ遅れ もう二度と

障害者らの震災証言 映画に

東日本大震災に巻き込まれた障害者や関係者の証言を集めたドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者」が完成した。「災害時には普段以上のハンディ」を抱える障害者の課題が浮かび上がる。

撮影したのは、ホームレスの男性や殺処分される動物などを撮ってきた飯田基晴監督（39）。

震災直後に被災地に入り、「東北関東大震災障害者救援本部」から撮影の依頼を受けた。映画の序盤に登場する男性は、頸椎（けいつい）損傷でベッドから起き上がれない。福島県いわき市のアパートで一人で暮らしていたが、震災時はヘルパーが訪問中で助けられた。

一方、同じいわき市で暮らしていた筋ジストロフィーの佐藤真亮さん（35）はほぼ24時間介護を受けていたが、週に3日、約1時間だけ一人になる時間があった。震災はその時間帯に起き、亡くなった。「もう諦めましょう」が最後の言葉だったと人づてに聞いた。

東日本大震災では、身体障害者手帳を持つ多くの人が亡くなった。宮城県内の沿岸自治体での障害者の死亡率は4％で、住民全体の死亡率の約3倍に上った。

飯田さんは「障害のある人は、状況が整っていないと逃げるスタートさえ切れない」と言う。

救援本部は映画のDVDを3千円で販売している他、自主上映会も募集している。インターネット通販アマゾンでも購入可。団体用には1万円で販売し、被災地の障害当事者や映画制作関係者の講師派遣も行っている。問い合わせは同本部（042・631・6620）へ。（山本奈朱香）

「逃げ遅れる人々」の一場面

20130316 朝日新聞

（第3種郵便物認可）

避難の実態 障害者の涙

ドキュメンタリー

30日 八王子で上映

東日本大震災で被災した発達障害や身体障害を抱える人々とその家族が、避難生活を送る上での難しさなどを描いたドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々」が30日、八王子市東町のクリエイトホールで公開される。飯田基晴監督は「災害時には障害が普段以上のハンデとなる。地域の人々と障害者が良好な関係を作り、支えあっていくことの大切さを伝えたい」と話す。

避難先で、他の避難者から心ない言葉をかけられたと話す女性

「発達障害がある娘を避難所に連れて行くと周りに迷惑がかかるため、（福島県南相馬市の自宅が）緊急時避難準備区域に指定されても家に残った」「避難先の（相模原市内の）家のトイレでは、電動車いすで入れず、使用できない」

映画には、被災した障害者10人が出演、困難な避難生活の実態を訴えている。脳梗塞の後遺症で左半身にまひが残る女性は、避難先の小学校にベッドがない中、「車いすにのったまま2週間ほど過ごし、横になれず、全く眠ることができなかった」と涙ながらに話していた。

飯田監督が、映画を撮影したのは2011年7月。学生時代に障害者の介助ボランティアをした経験があり、知人がスタッフを務める支援団体「東北関東大震災障害者救援本部」から、障害者ならではの震災時の苦悩を伝えてほしいとの依頼を受けたのがきっかけだ。

その後、約半年間、福島県南相馬市や岩手県宮古市などに通い、障害者の声を集めた。同じ避難所で暮らしていた人から「障害者なんだから、もう家に戻ってください」と心ない言葉をかけられたり、停電でマンションのエレベーターが動かなくなり、車いすで外出出来なくなったりするなど、様々な生活の困難を抱える障害者の訴えをカメラに収めてきた。

上映は午後6時半から。定員は約200人、入場料は1000円（要予約）。上映後は、福島県いわき市で被災し、相模原市内で避難生活を送る男性を招いたトークイベントも開催。問い合わせは、東北関東大震災障害者救援本部（042・631・6620）。

20130320 読売新聞

東日本大震災2年

「逃げ遅れる人々」の一コマ＝東北関東大震災障害者救援本部提供

東淀川では記録映画

被災障害者の姿追う

被災地の障害者たちが何を体験し、その後どんな思いで生きてきたかを追ったドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々―東日本大震災と障害者」が完成した。

24時間介護を受ける男性は、週に幾度かの「自由時間」に、津波にのまれた。ともに視覚障害のある夫婦は「迷惑がかかる」と避難所を避けた――。放射線の恐怖にさらされた福島県を中心に、障害者がその時、その後どう過ごしてきたかを、74分間の映像で追う。

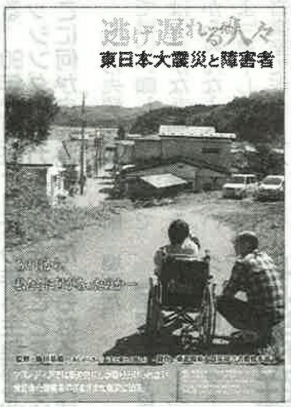
制作した「東北関東大震災障害者救援本部」によると、沿岸部の障害者の死亡率は、住民全体の死亡率の倍の2％。災害時要援護者リストから多くの障害者が漏れていた現実も明らかになった。「障害があるということは、災害時には普段以上のハンディとなる」とのナレーションが重い。

飯田基晴監督(39)は、「都市部に比べ、地方は自立支援などの環境が悪く、障害者が当たり前の生活をすることが困難。震災前も震災後も、変わらない。その現実を知ってほしい」と話す。上映会は午後2時、大阪市東淀川区の市立啓発小体育館。無料。字幕付き。問い合わせは、ゆめ風基金（06・6324・7702）。（宮崎園子）

20130228 朝日新聞【大阪市内】

●東日本大震災関連映画●

逃げ遅れる人々
東日本大震災と障害者



聞かれない声を記録した映画

2011年３月11日の東日本大震災で被災した障害者を物心両面で支援してきた「東北関東大震災障害者救援本部」がドキュメンタリー映画を製作した。監督は『あしがらさん』『犬と猫と人間と』の飯田基晴さん。

福島県で被災した障害者や支援者らの証言で構成される本作は、人々に平等にふりかかるはずの天災が社会構造によって「人災」に変化するさまを描き出す。東日本大震災において障害者の死亡率は健常者の２倍にもなる。難を逃れた人たちも、避難所では生活できなかったり、差別的な物言いをされたり、仮設住宅にスロープがないため外出できなかったり、発達障害の子どもにとって転校は難しいので避難できなかったりと、障害の「重さ」ではなく「環境」が整っていないために、さらなる困難を抱えさせられている。

いま現在の問題や課題に取り組まなければ、「復興」や「未来」は生み出せないのだ。

2012年／日本語／74分／日本語字幕（聴覚障害者用）
価格　一般3,000円　団体・ライブラリー10,000円
＊自主上映会の企画を募っている。詳細は以下に問い合せを。
東北関東大震災障害者救援本部
〒192－0046 東京都八王子市明神町4－11－11－1F
☎ 042（631）6620
FAX 042（660）7746
e-mail 9enhonbu@gmail.com

社会新報

（第３種郵便物認可）　高知新聞

被災地障害者 団結し奮闘

東日本大震災は障害者の生活を揺るがし、社会の課題を浮き彫りにした。介護者が不足し、働いていた事業所の閉鎖で仕事を失う人も。復興が進まず、日常を取り戻すめどが立っていない。だが缶バッジの製造、販売で収入を確保するなど、障害者が協力して課題を乗り越えようとしている。

缶バッジ販売で収入確保

支援不足 自立へ活動

障害者を雇用する事業所などが共同で製作した缶バッジを見せる「被災地障がい者支援センターふくしま」の白石清春代表（福島県郡山市）

福島県内の21の障害者団体が結成した「被災地障がい者支援センターふくしま」（福島県郡山市）。東京電力福島第1原発事故の影響で、介護者不足が深刻だ。脳性まひのため車いすで生活する白石清春代表(62)は「介護者が避難し、残った介護者の負担が増した。体調を崩す人が相次ぎ、離職が加速した」と話す。全国から毎週5人に応援に来てもらい、急場をしのいでいるという。

障害者を雇用していた事業所や共同作業所の中には受注が激減、閉鎖するところも。仕事をつくろうと、約70の事業所が団結し缶バッジを製作。約35万個を売り上げた。このバッジにひまわりの種を同封。自分で育てて採取した種を送り返してもらい、種から絞った油の販売を計画している。

「発生当初、意見や組織の違いを乗り越えて、21団体が一つにまとまったことで活動が円滑になった」と和田庄司事務局長(56)は振り返る。窓口を一本化したことで、福島県から相談や支援などの業務委託を受け、組織として安定。全国からの支援も受けやすくなったという。

岩手県沿岸部の宮古市の「被災地障がい者センターみやこ」は車いすの伊藤公陽さん(50)が代表を務める。月に1度、近隣の障害者が集まり、食事会の後、風船バレーボールなどを楽しむ。

車で1時間ほどの仮設住宅に住む知的障害のある30代の女性もその一人。「親が年を取り、今後が不安で眠れない。昨夏から睡眠薬を飲み始めた。ここは思い切り笑える貴重な場所」と語る。

この事務所設立の立役者は「ゆめ風基金」（大阪市）の理事、八幡隆司さん(55)。1995年の阪神大震災以来、災害のたびに、被災地の障害者を支援してきた。2億円の基金を元に3・11以後、福島や宮城で障害者が支援拠点をつくるのに協力。その後、宮古市で障害者の通院や買い物の送迎などを続けている。

「2年で支援が必要なくなった阪神大震災に比べ、今回は見通しが立たない」と八幡さん。「東北では家族介護が当たり前で、福祉サービスを利用することに慣れていない」と都市部との違いを指摘する。

今後は送迎などの支援をするNPOをつくり、宮古市在住の障害者2人を含むスタッフ6人に引き継ぐ計画だ。伊藤代表は「人口流出が続く宮古市で事業を続けられるか不安」と話すが、機械整備の技能を生かして宮古で初の車いす修理サービスを事務所で始めた。

被災地の主な障害者支援拠点

罵声浴び避難所退去も

障害者支援団体「日本障害フォーラム」（東京）の藤井克徳幹事会議長は「『障害者を締め出す社会は弱くてもろい』と国連は決議した。行政の復興委員会の正式メンバーに障害者がいないのは問題」と話す。さらに「住民に罵声を浴びせられ、退去を促され、避難所にいられなかった障害者もいた」と深刻な人権侵害を批判する。

障害者の自立運動に取り組む「全国自立生活センター協議会」（東京）の中西正司常任委員は「仮設住宅はあるが移動手段がなかったり、スロープが急で、トイレが狭いなど実際に車いすで使用できない住宅が多かった」とそれぞれの障害に合った支援の必要性を訴える。「障害者手帳を持たないひきこもりやうつの人が支援の対象になりにくい」と今後の課題を指摘した。

障害者の個人情報 「災害時は開示を」

「被災地障がい者支援センターふくしま」は東日本大震災の発生当初、福島県内約200カ所の避難所で障害者を探した。障害が重度の人ほど姿が見えず、障害者手帳を持っている人の情報開示を自治体に求めた。だが、南相馬市以外は個人情報保護法を理由に開示しなかった。同センターは「情報を開示していればもっとたくさんの人を助けられた」と改善を要望している。

20130306　高知新聞

「死亡率2倍」問う

被災障害者 映画に

支援や備え訴える

東日本大震災で被災した障害者の記録映画2本が完成し各地で上映されている。障害者の死亡率は健常者の2倍とされ、関係者は「人のつながりがあれば」と悔やむ。避難所で心ない言葉を浴びせられた人、「迷惑を掛けるから」と避難所に行かなかった人もいる。映画は支援の取り組みも伝えながら、地域のつながりや備えの大切さを訴える。

映画「生命（いのち）のことづけ」（製作・日本障害フォーラム、日本財団など）の試写会が5日、参院議員会館（東京・永田町）で開かれた。会場には約300人。副題は「死亡率2倍　障害のある人たちの3・11」。宮城県などの資料から計算し、障害者を取り巻く問題を象徴する数字として副題に掲げた。

音声解説と手話、字幕付きで英語版とスペイン語版がつくられ、5月にジュネーブ、9月にニューヨークの国連機関で上映予定。会議の合間に見られるよう時間は37分に抑えた。国内は仙台市や愛媛県で公開される。

進行役として出演する早坂洋子さん(30)は目と耳が不自由。震災当日は買い物をしていた。電柱が倒れひび割れた道を1時間半、仙台駅から6キロ先の半壊した自宅まで歩いた。「介助者と一緒にいたから助かった。一人だったら津波情報を見ることも聞くこともできなかった」と早坂さん。

顔見知りの近所の人に助けてもらったり、障害を理解してもらえず避難所で罵声を浴びせられたりした例も紹介される。

支援団体によると「近所に障害のある人が住んでいたことを知らず何もできなかった」と悔やむ住民もいるという。監督は耳が不自由な早瀬憲太郎さん(39)。「普段から地域のつながりがあれば、助けられた命もあったはずだ」と語る。

2月に完成した映画「逃げ遅れる人々」（製作・東北関東大震災障害者救援本部）は74分の作品で、3月末までに静岡県や兵庫県などで計11回上映予定。

35歳で亡くなった福島県いわき市の佐藤真亮さんは、全身の筋肉が萎縮する筋ジストロフィーのため人工呼吸器と車いすを使い暮らしていた。ほぼ24時間、ヘルパーが介護していたが、ちょうど交代時の1時間余りの間に津波にのまれた。

福島第1原発事故で一時、市民の大半が避難した福島県南相馬市。発達障害のある娘2人を育てるシングルマザーは自宅にとどまった。「子どもの健康を考えると、ここにいてはいけないかもしれない」「でも子どもが避難所で騒いで周囲に迷惑を掛けたら」―。迷いながら、母親は「せめて精神面だけでも子どもには安心感を与えたい」と残ることを選んだ。

飯田基晴監督(39)は「震災当時の苦労を思い出し、話しながら涙を流す人がたくさんいた」と振り返る。映画は飯田監督のナレーションで結ばれる。「(災害時は)障害があることでさらなる困難に直面する。この事実を前提として制度を整え、支え合う態勢をつくらなくてはならない」

撮影の打ち合わせをする耳が不自由な早瀬憲太郎監督（左）と、出演者で目と耳が不自由な早坂洋子さん＝2月、東京都内のスタジオ

「生命（いのち）のことづけ」のブルーレイディスクと「逃げ遅れる人々」のDVDは自主上映会用に上映権付き各1万円で販売している。「逃げ遅れる人々」は個人向けに3000円で一般販売する。「生命のことづけ」の問い合わせ先は日本障害フォーラム。☎03・5292・7628。「逃げ遅れる人々」の問い合わせ先は全国自立生活センター協議会内の東北関東大震災障害者救援本部。☎042・631・6620。

20130311 埼玉新聞、20130309 岐阜新聞、20130309 京都新聞
20130309 中国新聞、20130309 徳島新聞、20130316 熊本日日

新聞　（第3種郵便物認可）

障害者の苦境知って

避難所行くの遠慮　帰宅促された

「迷惑をかけるから」と避難所に行かなかったり、行っても自宅に帰るよう促されたりした障害者がいたことを知ってほしい―。東日本大震災で障害者が直面した困難を紹介するドキュメンタリー映画「逃げ遅れる人々」が完成した。二月三日、東京都渋谷区で記念上映会が開かれる。（福岡範行）

福島第一原発事故が起き、周りの人々が次々と避難する中、視覚障害のある福島県の夫婦は避難所へ行かず、自宅にとどまった。

「（避難所の）皆さんに迷惑を掛けてはいけないから」。映画の中で、そう答えた。

「逃げ遅れる人々」では、十人以上の障害者や施設のスタッフがインタビューに答えている。発達障害のある子を持つ母親は、移動が難しいからではなく、避難所でのトラブルを恐れ、自宅から逃げられなかった胸の内を明かす。

避難所に行った人も、さまざまな困難に直面した。ベッドがないため、車いすからずっと降りられなかった人。障害のない人からショックを受けた車いすの女性も。

自宅に帰るよう促され、

映画は、震災から三カ月後の二〇一一年六月、障害者団体を中心に発足した「東北関東大震災障害者救援本部」（事務局・東京都八王子市）が、映画監督の飯田基晴さん（三九）＝横浜市＝に依頼し、製作を開始した。

飯田基晴監督

飯田さんは昨年三月まで、福島県を中心に脳性まひや視覚障害、知的障害の当事者や支援者を取材。当初は障害者の被災状況を記録するのが目的だったが、それだけでなく、多くの課題があったことを知ってもらう必要があると実感した。

上映画「逃げ遅れる人々」で、仮設住宅のスロープを障害者が点検するシーン
下映画「逃げ遅れる人々」のチラシ

震災時の課題 映画に　3日に上映会

飯田さんは「事情はさまざまだけど、どうしても健常者と同じようには逃げられない。しんどい思いをするのが分かるから、避難所に行かない障害者も多い」と話す。

救援本部スタッフの西尾直子さん（三七）も、避難先の体育館が寒い場合、頸椎（けいつい）損傷で体温調節が難しい人は生死に関わるが、周囲の理解を得られず暖房のそばに行けないケースもあると指摘。「多様なニーズがある人のことを考えるきっかけにしてほしい」と訴える。

上映会は午前十一時と午後二時の二回、東京ウィメンズプラザで。一時間十四分。予約制の先着順で料金は千円。DVDも千枚作り、一般向けは三千円、上映会開催用は一万円で販売する。

問い合わせは、救援本部＝電042（631）6620、ファクス042（660）7746、メールgenhonbu@gmail.com＝へ。

201301 東京新聞

テレビ放送

・おはよう日本（NHK）

・ハートネット TV（E テレ）

・ニュースの深層（朝日ニュースター）

書籍

・季刊　福祉労働 138　現代書館

・週間金曜日